

# 日本の旧植民地における歴史・考古学系 博物館の持つ政治性

——朝鮮総督府博物館及び「満洲国」国立（中央）博物館を  
事例として——

大出尚子

はじめに

博物館の持つ機能は、植民地統治と深い関係を有するものである。この相互関係は西欧だけでなく、戦前期日本と植民地化された諸地域にも歴史的に認められる。

一九世紀の西欧植民地主義は、植民地にある遺跡を博物館化することで、支配を正当化した。<sup>1)</sup> また、他者像を構成する装置として大きな発展を遂げた博物館は、文学や映画のような表現形態に比べて、植民地化との関係がはるかに深いといわれている。<sup>2)</sup> 博物館は、一九世紀から二〇世紀にかけて、国民国家形成・維持のための諸制度が整えら

1 日本の旧植民地における歴史・考古学系博物館の持つ政治性 大出

れるなかで、国民統合のための一つの装置として存在したとい<sup>3)</sup>う。日本において博物館の諸制度は、明治初期に西欧から移入された。明治新政府は殖産興業の一環として博覧会の開催を推進し、その後、博覧会の展示物と建物を利用して常設の博物館が誕生した<sup>4)</sup>。そして、一九世紀末以降の帝国主義化に伴う植民地拡大を背景に展開した日本の博物館政策は、「内地」にとどまらず「外地」でも実行された。このように、日本の博物館も西欧諸国と同様に植民地統治と不可分な関係にあった。

台湾・朝鮮<sup>5)</sup>・樺太、そして関東州や「満洲国」<sup>6)</sup>では、日本人の主導によって博物館が設置された。先行研究では、日本の旧植民地における博物館政策に関して、博物館設置者の政治的意図が問われてきた。山室信一は、朝鮮総督府博物館や総督府恩賜記念科学館を日本人の「新たな学知の優位性を体現する装置」、「満洲国」国立中央博物館を「独立国家としての体裁」が整えられるなかで設立されたものと指摘する<sup>7)</sup>。特に、研究蓄積の薄い「満洲国」の博物館に関する研究では、このような包括的な議論がみられる<sup>8)</sup>。ただし、旧植民地博物館の政治性を指摘するならば、朝鮮半島・中国東北に固有の歴史性・地域性や運営者の相違をも考慮に入れ、個々の博物館のコレクション形成が、どのような考え、あるいは明示的ではないものも含むどのような社会的要請に基づくものであったのか<sup>9)</sup>、さらには各地域の統治において果たした役割など、議論を深めるべき点は少なくない。

このような研究視角から、筆者はこれまで、主に「満洲国」に設置された個別の博物館を取り上げ、設置場所・時期・運営者など各要素の相互関係に十分留意しつつ、博物館が持つ政治性の内実を明らかにしてきた。また、そうした作業を通じて「満洲国」の実態の解明に挑んできた。本稿では、前述の研究成果と視角を朝鮮の博物館事業の検討に援用する。また、朝鮮や「満洲国」の博物館を「植民地博物館」と一括りにする既成の枠組みに束縛されることなく、朝鮮が台湾・樺太や関東州とともに「植民地帝国日本」の「公式の帝国」の一部として認められた

地域<sup>(10)</sup>であり、「満洲国」が「非公式の帝国」であった点に留意した考察を試みる。そして、この違いが、個々の博物館の運営方針や諸活動・展示の次元においてどのように表面化したのかを明らかにしたいと考える。具体的な作業としては、まず朝鮮で中央博物館の役割を担った朝鮮総督府博物館と、「満洲国」で中央博物館の役割を担った「満洲国」国立博物館（後に「満洲国」国立中央博物館に改組）を祖上に乗せ、設立背景・設立目的・建物の立地・職制・収蔵品の来歴・展示の特徴について、それぞれの歴史性・地域性と植民地としての政策課題との対応関係から比較検討する。そしてこの検討を踏まえて、朝鮮総督府博物館と「満洲国」国立（中央）博物館の展示構成に反映された歴史叙述の政治性を解明する。

## 第一章 朝鮮総督府博物館と「満洲国」国立（中央）博物館の設立の背景と目的

### （一）沿革

朝鮮では、一九一〇年九月三〇日、勅令第三五四号・朝鮮総督府官制が發布され、朝鮮総督府が設置された。そして一九一五年九月から一〇月、朝鮮王朝の王宮であった景福宮内において「総督府始政五年記念朝鮮物産共進会」が開催され、十一月九日、告示第二九六号に「朝鮮総督府博物館ヲ京城旧景福宮内ニ設置シ大正四年十二月一日ヨリ一般ノ観覧ヲ許ス」と記されたことをうけ、総督府博物館が開館した。一九二六年六月二〇日には、総督府博物館慶州分館が開館した。また一九三九年四月には、一九二九年に開設された百済遺物陳列館が総督府博物館扶余分館に再編され、さらに、一九三九年五月には公州分館の落成式が行われた。<sup>(11)</sup>このように朝鮮総督府博物館は、本館と三つの分館を有していた。

中国東北では、一九三二年三月一日に「満洲国」が建国され、同年六月には、日本の外務省文化事業部が「東方文化事業」の一環として「満洲国」に対する文化面の「助成・協力」に着手した。一九三三年一月七日〜一九日に「日滿（満日）文化協会」の第一回総会が開催され「日滿（満日）文化協会」が成立すると、同協会が国立博物館の設立に着手することになった。設立は、日本のアカデミズムと清朝の遺臣たちとの協同事業として進められ、一九三五年六月一日、奉天に国立博物館が開館した。また、滿鉄教育研究所附属教育参考館の流れをくむ自然科学博物館が新京に開設され、一九三九年一月一日に国立中央博物館が官制施行すると、新京の博物館は「国立中央博物館新京本館」、奉天の国立博物館は「国立中央博物館奉天分館」に改組された。一九四〇年七月十五日、新京本館の大経路展示場（常設展示場）が開館し、また開館当初から副館長・藤山一雄の構想による民俗展示場の建設が進められ、一九四一年九月には、民俗展示場の第一号館となる漢族農家の家屋が完成した。しかしながら、一九四五年八月九日のソ連軍の進攻により大経路展示場は破壊され、民俗展示場も八月一日に予定していた第二次開館式を待たずに「満洲国」の崩壊とともに消滅した。以上のように、改組後の国立中央博物館は、新京本館の大経路展示場と民俗展示場、及び奉天分館の三つの施設を有していた。なお、本稿では、国立博物館期（奉天、一九三五年〜一九三九年）を第一期、国立中央博物館期（新京本館・奉天分館、一九三九年〜一九四五年）を第二期と称することにする。

## （二） 設立契機

朝鮮総督府博物館は、一九一五年九月一日から一〇月三十一日に、景福宮で開催された「総督府始政五年記念朝鮮物産共進会」の終了後、同年十二月一日に開館した。ここでまず確認できることは、朝鮮総督府博物館が、博覧

会や物産展を契機に博物館が設置された日本「内地」及び台湾と同様の経過を辿って設立された点である。そして、開館前後の展示は、

大正四年九月より一〇月に亘り京城景福宮内に施政五年記念朝鮮物産共進会を開催するや、場内の中央に煉瓦建重層の美術館を建て、館内中央広間には慶州南山の薬師寺如来座像・甘山寺石仏を据へ、周囲には有名な石窟庵の仁王・菩薩・天帝の模造を嵌し、階上階下の陳列室には三国時代以下各時代の歴史的美術的参考品を陳列し、以て朝鮮各時代の美術工芸並に文化を紹介した。本館の陳列品は古蹟調査に依つて発掘または蒐集し得た所のものを漸次整理陳列して之を充実し、又は地方に破損存在する有名なる塔碑仏像の如きは、動もすると全く失亡の虞あるを以て、此等は鄭重に遺片を拾集して博物館に運搬移転し、一には衆庶の観覧に供し、一には之が保存を確実にしたるものも尠くない。<sup>(15)</sup>

とあるように、共進会時の建物と展示品を継承しながらも、開館以後は文物保存を名目として古蹟調査による学術発掘品を収集・展示することにより、館内を充実させていく意向があった。なお、共進会の意図は、朝鮮人に対しては日本統治下での産業の発展ぶりを認めさせ、日本人に対しては朝鮮産業の発展した状況を認識させることに置かれていた。<sup>(16)</sup> そもそも、朝鮮王朝の王宮で共進会を開催すること自体が、日本の、朝鮮に対する植民地支配を象徴する出来事だったといえよう。

「満洲国」国立博物館は、一九三三年一〇月に成立した「日滿(満日)文化協会」の事業の一環として設置計画が進められた。また、「日滿(満日)文化協会」創設前には、奉天故宮の文溯閣『四庫全書』等の古典籍保存を目的とし、館長を袁金鎧、副館長を金毓黻として一九三二年六月一八日に国立図書館が開館した。国立図書館の開館当初は、新たに国立文化院を創設して図書館とともに博物館を併設する計画であった。<sup>(17)</sup> 具体的には、国立文化院は

「一、研究所ノ経営、二、図書館ノ経営、三、博物館ノ経営」を行い「博物館ハ奉天故宮内ニ置く<sup>(18)</sup>」とされていた。<sup>(19)</sup>このように、国立文化院の一機関として奉天故宮を国立の博物館とする計画があったものの、実際には、図書館が旧張学良邸に、博物館が旧湯玉麟邸にそれぞれ開設されたことともなつて、国立文化院構想は自然消滅した。

### (三) 建物の立地

朝鮮総督府博物館の展示室は、一九一五年の共進会の際、景福宮内に建造された美術館を引き継いだ本館、及び景福宮の勤政殿・思政殿・修政殿が充てられた。<sup>(20)</sup>なかでも修政殿には、大谷光瑞が西域探検の際に収集した発掘品が展示された。<sup>(21)</sup>総督府博物館は、景福宮内に、宮殿の一部を壊して建造された総督府庁舎とともに、政治的支配と文化的支配を視覚的に訴える効果があり、植民地朝鮮に対する政策課題とも符合していた。<sup>(22)</sup>

「満洲国」国立博物館は、一九三四年一月に、奉天市商埠地八緯路にあった旧王松岩邸に国立博物館籌備事務所を開設した後、旧熱河総督の湯玉麟邸を利用して開館した。

さて、朝鮮総督府博物館と「満洲国」国立博物館の立地を比較すると、次のような疑問が浮上する。なぜ、「満洲国」では、国立文化院構想の段階において「博物館ハ奉天故宮内ニ置く」としていたにもかかわらず、実際には清朝の副都・盛京の宮殿であった奉天故宮を国立博物館としなかったのだろうか。なお、「満洲国」における奉天故宮博物館の位置付けは、「奉天省公署教育庁長ノ管理ニ属<sup>(23)</sup>」する省立の博物館であった。奉天故宮博物館を管掌していた奉天省教育庁が刊行した『礼教概要』によると、一九三四年時点で奉天省は「博物館、図書館、教育館を拡充して民智を啓蒙し文化の向上を図る」こと、「奉天省立故宮博物館、奉天省立図書館の拡充利用」という方針を掲げていた。<sup>(24)</sup>だが、その二年後の一九三六年四月末日をもって、奉天故宮は閉鎖されるに至った。この突然とも

いえる計画変更の背景には「満洲国」特有の事情、すなわち清朝皇帝権力の表象である奉天故宮を、清朝の復辟国家であることを否定する「満洲国」の国立博物館とすることに躊躇があったのではないかと推測されるのである。<sup>(25)</sup>

#### (四) 所管と職員

朝鮮総督府は、関野貞を中心に内務部で進めていた古蹟調査と、鳥居龍蔵が一九一一年から学務局編輯課で進めていた資料調査の二つの事業を統合し、一九一六年四月に総務部総務課に移管し、それらの事業を総督府博物館が統轄した。また、博物館開館翌年の一九一六年には「古蹟及遺物保存規則」の発布、「古蹟調査委員会規程」の制定、古蹟調査委員会及び博物館協議会の設置と、博物館事業関連法規の整備、博物館事業の組織化がなされた。一九二〇年には庶務部文書課、一九二二年七月には学務局宗教課所管の古社・古建築保存事務と統合した学部局古蹟調査課、一九二五年七月には学務局宗教課に、博物館・古蹟・古建築・名勝天然記念物調査保存等の事業が移管された。朝鮮総督府博物館には独立した職制が無く、館長を置かず、総督府所属の事務官が主任として業務を統轄し、二〜三名の技手と五〜六名の雇員が活動を担った。<sup>(26)</sup>古蹟調査は、古蹟調査委員会のもとで博物館がその事業を担当していたのだが、管見の限りで、古蹟調査事業に関わった人物は、古蹟調査委員の関野貞・黒板勝美・今西龍・鳥居龍蔵・小田省吾・浅見倫太郎・工藤壮平・劉猛・柳正秀・具義書・谷井濟一・濱田耕作・原田淑人・池内宏、囑託研究員の有光教一・藤田亮策、囑託職員の梅原末治・小場恒吉・小泉顕夫・澤俊一・野森健・榎本亀次郎・小川敬吉・馬場一郎であった。<sup>(27)</sup>発掘調査を担当したのは、朝鮮総督府博物館の職員であった。<sup>(28)</sup>ただし、朝鮮総督府博物館には学芸員組織が無く、例えば藤田亮策は、京城帝国大学法文学部教授として朝鮮史講座の教鞭を執る傍ら、朝鮮総督府博物館の主任を兼任していた。<sup>(29)</sup>また朝鮮総督府の小田省吾は、博物館課長を兼任した。<sup>(30)</sup>なお、朝鮮では

法規上、総督府が任命した古蹟調査委員か総督府博物館職員でなければ遺蹟の発掘調査を行うことができず、総督府が実施する発掘調査以外は「私掘」とされた。<sup>(31)</sup>このような職制からみて、朝鮮総督府による古蹟調査と博物館事業とは不可分の関係にあったことが分かる。

「満洲国」では、一九三二年三月九日に「政府組織法」が公布され、これによって國務院が「満洲国」の行政府となり、同時に公布された「國務院官制」により國務院民政部のなかに文教司が設置された。同年七月五日、文教司は民政部から独立して文教部となり、文教部に総務司・学務司・礼教司が設置された。博物館は、社会教育の施設と位置付けられ、文教部礼教司社会教育科成人教育股が管轄した。<sup>(32)</sup>国立博物館の一九三五年から一九三七年の職員には、まず、「奉天地方自治会」「奉天地方維持委員会」の構成員で清末から民国初期にかけて奉天地方政界を担っていた楊鍾羲が鄭孝胥から要請を受けて館長に就任し、<sup>(33)</sup>雇員に園田義範・井上経春・深澤セツ子・佐々木徳子、嘱託に前田莊三・河瀬松三、一年期限の嘱託に小平総治・穆敏・長陸・郝慶柏がいた。なお、嘱託の前田と河瀬は文教部庶務科の職員であった。<sup>(34)</sup>そのほか、三枝朝四郎・宮崎浩・上原之節・高橋匡四郎・岩間徳也・三宅俊成・園田一亀・島田貞彦・森修などが発掘調査に関わった。<sup>(36)</sup>また、一九三七年一月には、「満洲国」終焉後も同館の活動を担った李文信が、学芸官佐として任用された。<sup>(37)</sup>一九三九年の国立中央博物館官制施行後は、「国立中央博物館官制」第二条で館長に「満人」を特任官として充てる予定であったが、<sup>(38)</sup>実際は館長不在のまま、副館長の藤山一雄が博物館の運営を取り仕切った。その他、国立中央博物館の職員には、新京本館の自然科学部の学芸官に遠藤隆次、木場一夫、二井内勝治、野田光雄、北川政夫、学芸官佐として尊田是が、奉天分館の人文科学部の学芸官に三宅宗悦、羅福頤、学芸官佐に李文信、嘱託職員として小平総治、上原之節がいた。<sup>(39)</sup>

ところで、朝鮮総督府博物館の職員について全京秀は、三〇年もの長きにわたり博物館活動を展開するなかで、

その間に朝鮮人の専門家をただの一人も育成せず、朝鮮文化に関する研究と、展示を担当する博物館の経営、そして専門的な業務過程から朝鮮人を徹底して排除し、総督府時代には植民地出身の学者を全く育成しなかったと指摘する。さらに全は、植民地時代に専門家が育成されなかったがゆえに、ソウルと平壤では日本人専門家を抑留し、発掘調査の知識を習得するはかはなかったのであるとする。<sup>(40)</sup>

他方、中国東北では、元国立中央博物館の学芸官らが、「満洲国」終焉後に中国東北の考古学界・博物館界を牽引した。一九三三年の渤海東京城調査に参加した金毓黻は、国立中央博物館奉天分館が一九四五年に国立瀋陽博物院に改組された際に院長に就任し、李文信は考古学者として、羅福頤は金石学者として「満洲国」終焉後の該館の活動を支えた。<sup>(41)</sup>このように「満洲国」の博物館は、戦後の博物館界への人材の供出という点において、朝鮮の博物館の事例とは異なっていたのである。

#### (五) 収蔵品の来歴

朝鮮総督府博物館では、開館時は一九一五年の共進会の展示品及び朝鮮総督寺内正毅の寄付金により鮎貝房之進『朝鮮地名攷』『姓氏攷及族制攷』の著者<sup>(42)</sup>や三宅長策（京城控訴院部長・弁護士）等の日本人コレクターから購入した文物を中心とし、開館以後は、主に古蹟調査で収集した學術発掘品・山田鈇次郎や関口半平壕高等法院検事長の寄贈品（主に楽浪の遺物）・古物店からの購入品を展示した。<sup>(43)</sup>朝鮮総督府博物館の展示室の構成は、【表①】のとおりである。収蔵品は一九三三年時点で二万二九〇八点、【表②】の展示品と「外支那収集参考品」一四四四点<sup>(44)</sup>計二六四一点を展示した。

「満洲国」国立博物館の収蔵品は、開館までの半年余りの間に、主に以下の六つのルートによって集められた。<sup>(45)</sup>

第一に、張作霖・張学良父子の旧蔵品で主に乾隆年間製の美術工芸品、順治帝・康熙帝・雍正帝・乾隆帝・嘉慶帝の書、明・清代の書画骨董類。第二に、湯玉麟・湯佐栄父子の旧蔵品でもとは清朝歴代皇帝の命によって収集された文物、乾隆年間製の美術工芸品、遼代の墓誌。第三に、羅振玉からの寄贈品。羅振玉は周・戦国・漢各代の銅器、漢・六朝・唐・元各代の明器・俑類をはじめ、多数の文物を博物館へ寄贈している。第四に、黒田源次、山下泰蔵、杉村勇造からの寄贈・寄託品で、遼代の陶器として特徴的な「鶏冠壺」などの古器。第五に、陶湘の旧蔵品で、

【表①】 朝鮮総督府博物館の展示室の構成（1926年）

本館	第1室	仏教遺物
	第2室	三国時代及び新羅一統時代
	第3室	高麗時代及び李朝時代
	第4室	楽浪帯方時代
	第5室	特殊品陳列
	第6室	書画
修政殿	中央亜細亜発掘品	
勤政殿 (閉館=1926~?)	西廻廊	李朝時代各種銃炮類
	東廻廊	高麗李朝の塔碑石棺、石造および鉄造の仏像類
思政殿	?	

出典：『朝鮮総督府博物館報』1, 1926年, 5-16頁。なお, 1935年2月時点の本館の展示室構成は「ホール」「三国時代古墳出土品」「楽浪帯方郡時代遺物」「絵画・壁画模写」「高麗李朝時代工芸品及仏教関係遺物」(小泉顕夫「朝鮮博物館見学旅日記」『ドルメン』4-3, 岡書院, 1935年, 32-36頁。)

【表②】 朝鮮総督府博物館本館陳列品および出品数

仏像仏具	178	土器	179
陶磁器	184	古瓦埴	88
古銭	70	古鏡	153
武器	338	馬具	76
書画	91	装身具	475
活字	9	印鑑	24
棺および棺金具	46	塔碑および燈籠	32
土偶	76	雑品	478

出典：『朝鮮総督府博物館報』4, 1933年, 29頁。

【表③】「満洲国」国立博物館の開館時の  
展示構成（1935年）

第1室	仏像	第2室	服飾
第3室	仏像及び仏器	第4室	銅器
第5室	銅器及び陶器	第6室	陶磁器
第7室	磁器	第8室	景泰藍
第9室	文房及び什器	第10室	銅版画
第11室	清代書画	第12室	御筆
第13室	御筆	第14室	明・清代書画
第15室	明代書画	第16室	宋・元代書画
第17室	宝座	第18室	刺繡
第19室	刻絲	第20室	明器
第21室	墓誌	第22室	古代遺物
廊路	掛屏	別室	墓誌

出典：『盛京時報』康徳2年5月31日4面および著者  
不明「満洲国立博物館陳列品目録」『滿蒙』16-  
7, 1935年, 173-180頁。

「日滿（満日）文化協会」が、外務省文化事業部の資金援助を受けて購入し、博物館へ寄贈した北魏から唐の墓誌類四六種六二点<sup>(46)</sup>。第六に、朱啓鈴旧蔵の宋・元・明・清代の刻糸・刺繡である。

以上に挙げた収集ルートの影響から、国立博物館のコレクションはまず、もとは清朝歴代皇帝の命によって収集され、熱河の避暑山荘に所蔵されていた文物（旧清室財産）、すなわち「清朝色」を持つ文物、そしていわゆる中華文明的な文物と、さらに考古学成果による学術発掘品を加えた、大きく三つの特色をもつものによって構成されていた。開館時の展示構成は【表③】のとおりである。国立博物館の開館当初の展示の特徴は、展示品には熱河の避暑山荘・外八廟に来源を持つ乾隆年間製の文物が多く、珍重されていたのは中華文明の粹を示す刻絲・刺繡や、

考古学調査と関連の深い「鶏冠壺」及び墓誌であった。

開館以後は、東亜考古学会（一九二六年創立）による赤峰や東京城における学術発掘品など出拠の明らかな学術価値の高い収蔵品が増加し、一九三六年一月時点で四五三三点（うち陳列品一四八七点）となった<sup>(47)</sup>。

国立博物館では、開館以後着手された展示の一部陳列替えに伴って、これまで中心的かつ最も珍重されていた既存の遼代の墓誌に代わり、高句麗（輯安）、渤海国（東京城）、遼（ワリーマンハル

慶陵)、金(白城)等の学術発掘品を展示した。特に、渤海東京城の資料は、一九三三年と一九三四年に東京帝国大学の原田淑人ら東亜考古学会の研究者によって発掘されたもので、一九三七年の展示替え以降、徐々に、「満洲国」領内の学術発掘資料の展示に重点が移っていった。「満洲国」の領土内で興亡した高句麗・渤海・遼・金各王朝の文物が国立博物館の主要な展示を構成するようになった結果、相対的に開館当初の特徴であった「清朝色」の強い展示から、東亜考古学会の発掘品を中心とした展示へと変化していった。このような展示の漸次的変化こそ、「満洲国」国立博物館の最大の特徴である。

渤海東京城遺跡の学術発掘品には、東亜考古学会が一九三四年の第二回調査の際、上京龍泉府の宮殿址から発掘した「和同開珎」が含まれていた。この「和同開珎」は、「たつた一枚の古銭」<sup>(48)</sup>であったが、この「和同開珎」が日本の奈良時代と渤海国の関係が密接であったことを宣伝する証拠品として国立博物館に収蔵され、そして誇大に展示されたのであった。ただし、この「和同開珎」について学芸官佐であった李文信は、この古銅銭は予め日本から持ってきて土に埋めたものを中国人に掘らせたのであり、「偽史事件」だったとしている。また李は、東亜考古学会の「文化侵略工作者」<sup>(49)</sup>らは、渤海国と日本の奈良平安時代の関係が密接であったことを宣伝する反面、中国とは大して関係がなかったと言っていたのである、と指摘する。<sup>(50)</sup> 実際には、「満洲国」では建国後、中国内地とは切り離れた「満洲国史」の構築が進められ、そのなかでは渤海史研究が重視されていた。

さらに、「和同開珎」の誇大展示の例を、次に挙げる「飛鳥奈良文化展覧会」<sup>(51)</sup>にみる事ができる。「飛鳥奈良文化展覧会」は、一九四〇年の皇紀二六〇〇年記念として同年四月二五日から五月二日に、新京敷島高等女学校体育館において「日滿(満日)文化協会」及び国立中央博物館の主催で開催された。この展覧会は、日本と「満洲国」の友好の淵源を、日本の奈良時代の渤海国との交流に求め、渤海国を「満洲国史」の内に位置付け、日本・「満洲

「国」友好に歴史の実体を与えることを目的としたものであった。<sup>(52)</sup> また、国立中央博物館の収蔵品中、展覧会に唯一出品されたのが、この東京城から出土した「和同開珎」であり、平城京から出土した「和同開珎」「万年通宝」「神功開宝」の三銭と並べて展示された。

## 第二章 古蹟調査と朝鮮総督府博物館

「満洲国」の古蹟調査と国立博物館の関係については既に検討したことがあり、東亜考古学会が「満洲国」領内で展開した学術調査で得られた発掘品を該館で收藏・展示し、常設展示において「満洲色」を創出することで「満洲国」に歴史の実体を与えようとしていたという結論を得ているので、本稿では、朝鮮の古蹟調査と総督府博物館との関係について検討する。

### (一) 関野貞の古蹟調査

一九〇二年、東京帝国大学工学部建築学の教授であった関野貞は、東京帝国大学の命を受けて慶州・開城等の古建築及び古蹟調査を実施した。関野は、この時の成果を『韓国建築調査報告書』（東京大学工科大学学術報告第六号、一九〇四年）にまとめた。関野は、一九〇九年に大韓帝国度支部の委嘱を受け、谷井濟一・栗山俊一を助手として、五年間で朝鮮半島全土の古建築調査を実施した。なお一九〇九年は、朝鮮半島において「古蹟調査事業」が開始された年として重要である。古蹟調査事業は、翌一九一〇年から朝鮮総督府の事業として継承され、一九三一年からは総督府博物館の外郭団体である朝鮮古蹟研究会に継承されて一九四五年まで続いた。<sup>(54)</sup>

関野は、一九〇九年に谷井らとともに研究者としてはじめて楽浪古墳を発掘し、一九二〇年代まで楽浪関係の発掘調査を主導した。一九一〇年、関野・谷井らは楽浪古墳の再調査を行った。さらに一九一六年には、関野・谷井らによって初めて総督府博物館の事業として一〇基の楽浪古墳が調査された。<sup>(35)</sup> 関野は、一九一七年六月にフランス国学士院より「スタニス・ラス・ジュリアン賞」を受賞したが、代表的な業績として評価を受けたのは、古蹟調査の成果を図版にした『朝鮮古蹟図譜』（全一五冊、一九一五年から一九三五年にかけて順次刊行）であり、その第一冊は『楽浪帯方郡高句麗』である。

朝鮮半島で展開された古蹟調査の特色としては、楽浪郡・高句麗・百濟・新羅と青銅器・新石器時代の古蹟が主な対象となったことである。<sup>(36)</sup> なかでも積極的に進められたのが、楽浪郡の古蹟調査であった。

楽浪郡の古蹟調査は、一九〇九年、関野による平壤の石岩里古墳の発掘以降、一九一六年の関野らの古蹟調査（一〇基）が総督府博物館の事業として実施され、それ以後も、一九二四年に藤田亮策・小場恒吉・小泉顕夫（四基）、一九二五年に東京帝国大学文学部（二基）、一九三〇年に野森健・檀本亀次郎（三基）、一九三一年に朝鮮古蹟研究会（二基）と、次々に調査が行われた。総督府博物館の機関誌『博物館報』によれば、「是等の調査と学者の研究とによって漢代文化の発展と工芸美術の驚くべき発達とは楽浪の土中より紹介せられ、漢文化を語るもの先づ楽浪を考慮しなければならなくなつた」<sup>(37)</sup> とあるように、調査目的は、朝鮮半島と中国大陸との歴史的関係性を顕示することにあつた。また、関野が先駆けて進めた楽浪郡の古蹟調査の成果は、「停滞的」で「他律的」な朝鮮の歴史像を構築する上で格好の材料を提供することとなつた。<sup>(38)</sup>

また、満鮮歴史地理調査室<sup>(39)</sup>で朝鮮の歴史地理を担当し、白鳥庫吉から東京帝国大学東洋史の正統を継承した池内宏の著書『満鮮史研究近世篇』（中央公論美術出版、一九七二年（初出は「朝鮮の文化」『岩波講座東洋思潮』第七

卷第八冊、一九三六年）二二〇頁）には、次のような記述がみられる。

楽浪郡が、実質的に海東の小支那であったことは……僅かな事実からも容易に想像せらるるところである。しかしそのありのままの姿を、もつと明らかに窺はうとすれば、それは文献の上では全然不可能である。……この缺陷を満たすにいちじるしく効果的であったのは、最近二、三十年の間、朝鮮総督府の一事業として遂行せられた古蹟調査である。まったく世人の注意を惹かなかつた遺蹟・遺物は闡明せられ、地下の埋蔵物は発掘せられた。郡県の遺址（五箇所）および出土品（埴・瓦当・平瓦・封泥・古銭・銅鏃等）、古墳（柳は木製あるひは埴築）および共存する各種の工芸品（漆器・金属器・玉器・陶器・銅鏡・兵器等）はその主要なるものであるが、楽浪郡が半島に存在した間―いはゆる楽浪郡時代―のその地方の支那文化が想像以上に高く華やかなものであつたことは、これ等の遺物と遺蹟とによつて具体的に説明せられる。さうしてそれは支那の本土においては窺ひがたい同じ時代の文化の一面にも光明を投ずるのである。

ここで池内は、「海東の小支那」たる楽浪郡の様相を明らかにするために「いちじるしく効果的」であつたのが、朝鮮総督府が進めた古蹟調査であつたことを明言している。そしてこの古蹟調査の成果によって、楽浪郡における「支那文化」の歴史の実態が具象化されたとしている。このように、朝鮮総督府の展開した古蹟調査は、当時の「満鮮史研究」が「朝鮮には自身で歴史を動かす力はなく、中国大陸からの外庄によってのみ歴史が展開し、その文化もすべて中国の模倣に過ぎない」とする「他律性論」<sup>(60)</sup>を補強する役割を担っており、そして次にみるように、そのような見解が総督府博物館の展示にも如実に反映されることになつたのである。

## (二) 朝鮮總督府博物館の展示内容

朝鮮總督府博物館の展示の特徴は、博物館の経営方針に、

主として半島古来の制度・宗教・美術・工芸其他歴史の徵証参考となるべきものを集め、半島民族の根原を尋ねて其の民族性を明にし、特に此の地に發達して来た工芸美術の特質を調査して廣く世界に紹介し、優秀なる芸術品を陳列して新たななる工芸美術の勃興に資せんと欲するものである。斯く半島の歴史及び美術工芸陳列館としての存在を主張するのは支那大陸及び日本列島の間介在して特種の状態にあつた半島の文化を根本的に調査し、其の密接なる相互關係を明にすると共に、又独特の精神文化を高唱し、之が保存と奨励とに努むるは最も意義あることと考へられるからである。<sup>(註)</sup>

とあるように、中国大陆と日本に「介在して特種の状態にあつた朝鮮半島の地理的特徴に注目しながら、中国と日本が文化形成面で朝鮮半島に及ぼした影響を強調した点にある。そして實際に博物館において朝鮮の美術工芸品を展示することによって、楽浪郡の古蹟調査が企図した中国大陆との歴史的交流だけでなく、日本との關係も表象しようとした。

ここで、朝鮮總督府博物館のなかでも特徴的であつた第二室・第四室・第五室の展示を取り上げる。【表①】のとおり、第二室は「三国時代及び新羅一統時代」、第四室は「楽浪帯方時代」、第五室は「特殊品陳列」の展示が行われた。

第二室の三国時代及び統一新羅時代の展示に関して『博物館報』に、三国時代は「北方の高句麗と南方の新羅百済の三国が、鼎立して居た時を云ふので、別に大和朝廷の統治下にあつた伽耶(任那)が新羅と百済との中間に介在して、實際は以上の三国と日本を代表せる伽耶との四国対立の時代」で、「当時半島と内地とが如何に密接なる

関係にあつたかは、此の陳列室の遺物の一々と大和朝廷時代の遺物とを比較したならば一目瞭然とすることであらふ<sup>(62)</sup>とある。また、一九三五年二月に該館を訪れた平壤府立博物館長の小泉顕夫は、三国時代の展示を見た感想として、「任那の遺物の陳列を以つて大体、三韓地方の遺物は終るのであるが、其次のケースには、如上の各地古墳から出土した土器の聚成陳列が行はれて居て、これに並べて日本出土の祝部土器の一群を配置して、其形式焼成の類似の上から上代日鮮文化の均等性を巧妙に説明されて居たのは面白いやり方だと思つた<sup>(63)</sup>」と述べている。朝鮮総督府博物館では一九三三年六月一日、「三国新羅時代仏像展覧」を開催した。この特別展では、三国時代・新羅時代の計七五点の仏像を展示し、一日で二八〇名あまりの来館者があった<sup>(64)</sup>。

第四室（のち第二室に移動）では、楽浪郡の古蹟調査の成果が反映された。まず、一九一六年に関野貞らが調査を行った石岩里第九号墳の発掘品（「青銅製博山爐」、「青銅製匱」、「金銅熊脚漆案」、「純金製帶鉸具」など）を展示した<sup>(65)</sup>。また、平壤郊外土城出土の「楽浪太守章」の封泥や「楽浪礼官」の文字瓦当などは、「楽浪郡の所在を示す好資料」<sup>(66)</sup>「楽浪研究の根本資料」<sup>(67)</sup>などと称され、珍重された。なお、一九三三年一月二〇日には、「楽浪古墳出土品特別展覧会」を開催し、一日で四〇〇名の来館者があった<sup>(68)</sup>。

第五室「特殊品陳列」には、石器・土器・骨角器・石劍・銅劍・銅鉞・前漢時代銅器・高麗時代青銅鏡・朝鮮活字を展示した<sup>(69)</sup>。この展示内容に関して全京秀は、「日本と同じ時代と判定できる旧石器や新石器時代の遺物を含む先史時代の痕跡と、日本列島より時期的に早いと考えられる青銅器と鉄器の遺物、そして世界的に最先端な歴史を示している活字といった遺物をすべて一室に混ぜ合わせて陳列している。そこには隠蔽の論理が作用していたに違いない……陳列室は朝鮮の歴史が三国時代から始まったとするイメージを強制するものであり、「半島民族の根源を明らかにする」という経営方針に反して、三国時代以前の遺物に特別の陳列室を用意しなかったのは、半島の

歴史を意図的に縮小しようとするものであった」と指摘する。ただし、留意すべきはまず、戦前の朝鮮考古学が歴史時代を主な対象としていたことである。一九〇〇年前後は、朝鮮の石器時代の存否自体が問題になっており、<sup>(70)</sup> 実な旧石器時代の存在を証明する遺跡の発見は、一九四五年以降のことであった。<sup>(71)</sup> このような朝鮮考古学をめぐる時代背景を考慮するならば、上記のような展示構成であったのは、朝鮮の歴史が三国時代からはじまったことを表象しているというより、日本本位の植民地史観を一定程度背景としつつも、当時の古蹟調査や朝鮮考古学の到達点・水準を強く反映したものであったといえよう。

### (三) 朝鮮総督府博物館の分館

朝鮮では、京城（ソウル）の総督府博物館本館のほか、慶州と扶余と公州に分館が設置された。

慶州は、新羅の旧都である。一九一五年に発足した財団法人慶州古蹟保存会が開設した陳列館を総督府に寄付する形で、一九二六年に分館化された。慶州分館では、一九二一年に金冠塚が発見されたことから、その古墳から出土した金冠・金耳飾などの純金帯金具やその他の発掘品、及び財団法人慶州古蹟保存会や個人からの寄託品を中心とした展示を行った。該館が展示対象とした時代は、三国時代新羅・任那・百濟及び統一新羅時代であった。<sup>(72)</sup>

慶州は、一九〇〇年と一九〇一年の八木契三郎による調査を嚆矢として、一九〇九年と一九一五年の関野貞による新羅古墳調査など、植民地期を通して重要な調査地域に位置付けられた。そのことは、一九三一年に設立された朝鮮古蹟研究会が、平壤とともに慶州に研究所を置いたことからも分かる。<sup>(73)</sup> 慶州が重視された理由は、単に新羅の旧都として遺跡の宝庫であったという理由からだけではない。日本の古墳出土遺物との関係を示唆する遺物の存在が、植民地支配の正当化につながる日本本位の植民地史観による歴史像の構築に有効だったからである。<sup>(74)</sup>

扶余は、百済の旧都である。総督府が扶余の古蹟調査に着手したのは一九〇九年のことであり、以降、一九一五年に関野・黒板・谷井が踏査して百済王陵と称された古墳の調査が行われ、一九三二年には谷井が壁画古墳を発見、冠金具残片等を発掘した。<sup>(76)</sup>このように、百済の史蹟が多数残存していたことから、一九二九年に財団法人扶余古蹟保存会が創設され、古蹟保存を目的とした陳列館が開設された。一九三九年四月一日に開館した扶余分館の創設の目的に、「扶余の地は「内鮮一体の聖地」といはれ百済の歴史と文物とが、その頃の日本を堅く結ばれてゐたことは夙に知られて居る処であり……百済の眞の文化に就ての認識を深め飛鳥文化との關係を明確に実物によつて知らしめようとして居る」<sup>(77)</sup>ことが挙げられていることから分かるように、特に日本との交流が重視された。

開城と平壤には、府立博物館が設置された。開城は、高麗の旧都である。一九三〇年一〇月、府政の実施に伴い開城邑が府になった記念として一九三一年に開城府立博物館が設立された。<sup>(78)</sup>主な展示品は、高麗の青銅器をはじめ、青磁・白磁・絵高麗・天目等の陶磁器であった。平壤は、楽浪郡の中心地であり高句麗の国都であった。一九二八年、図書館と同一建物内に開館したが、一九三二年に平壤名勝旧蹟保存会の事業として寄付を募り、平壤府より五千円、平南道より五千円、平壤保存会より二万円、計三万円の寄付金を得て、一九三四年六月に平壤府立博物館が新築・開館した。博物館長は小泉顕夫であった。<sup>(79)</sup>金石併用時代・楽浪時代・高句麗時代・新羅・高麗時代の遺物、好太王碑の拓本を展示した。<sup>(80)</sup>

このように朝鮮では、歴史や文化の特色を、日本との關係において明らかにすることを目的として旧都を中心に古蹟調査が行われ、それによって各地の博物館設立が促されたのであった。

おわりに

以上、本稿では、「公式の帝国」内の朝鮮総督府博物館と「非公式の帝国」である「満洲国」の国立（中央）博物館の特徴を、両地域の政治課題との関係から比較検討してきた。

朝鮮総督府博物館は、共進会の開催を契機に常設展示施設に改変したものであったように、近代日本の博物館設立と同様の過程を辿って設立された。また、朝鮮では、中央博物館（総督府博物館）の立地そのものが日本の植民地支配を象徴していた。制度的には、学芸員組織が無く、朝鮮総督府による古蹟調査事業と博物館活動とが不可分の関係にあった。展示は、歴史や文化面における「内鮮一体」を示すことを目的とした古蹟調査を学術的背景としていた。朝鮮で展開された古蹟調査で主な対象となったのは、楽浪郡・高句麗・百濟・新羅と青銅器・新石器時代であった。特に楽浪郡の古蹟調査は、朝鮮半島と中国大陸との歴史的関係を明らかにするだけでなく、日本との歴史的関係を明示しようとする朝鮮の考古学・歴史学の学術潮流と強く結び付き、それが「公式の帝国」の一部である朝鮮の総督府博物館では、経営方針として明確に掲げられ、そして、展示内容にも如実に反映されていた。

一方、「満洲国」では、元来あった奉天故宮を国立博物館とはせずに、歴史・考古学系の国立博物館を同市内に新設した。「満洲国」の博物館建設は、朝鮮の事例とは異なり、近代日本の博物館制度が直接導入されたわけではなく、独自の成立過程を辿った。「満洲国」国立博物館は、博物館の開館前から「満洲国」領内で発掘調査が行われていたものの、朝鮮総督府博物館のように開館当初から古蹟調査で得られた学術発掘品を主たる展示としていたわけではなかった。「満洲国」国立博物館は、開館当初、「清朝色」を持つ文物及び中華文明の粋を示す文物を主た

る展示としていたが、一九三七年以降の展示替えにともない、徐々に「満洲国」領内の古蹟調査で得られた学術発掘品の展示を重視するようになっていった。このことは、清朝の「遺産」・「遺制」というものが、「満洲国」においてまさに否定し、克服すべき対象だったことを意味している。しかしながら、「満洲国」の建国当初は、政治的には清朝最後の皇帝であった溥儀を執政・皇帝に推戴し、文化面でも清朝の遺臣たちとの「協力関係」は欠くことのできないものであり、博物館事業に「日滿（満日）文化協会」が関与したことも相俟って、脱清朝色は漸次的な展開とならざるを得なかったのである。

第一期から第二期にかけての度重なる展示替えにより、「満洲国」国立中央博物館では、「満洲国」領内で歴史的に興亡した高句麗・渤海・遼・金各王朝の文物が主要な展示を構成するようになった。これは、中国内地の歴史とは切り離れた「満洲国史」の創出という「満洲国」の政治課題を端的に反映するものである。また特に注目すべきは渤海に関する企画展示であり、ここでは日本と「満洲国」の友好に歴史的事実を与えることが企図された。以上のような展示により、「満洲国」が清朝の復辟国家と考えられることを否定しようとしていたのである。ここに、「非公式の帝国」たる「満洲国」内の博物館の特徴を見出すことができる。

## 注

(1) ベネディクト・アンダーソン（白石さや・白石隆訳）

『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行』（増補

版）NTT出版、一九九七年、二九六頁。

(2) 荻野昌弘「民族の展示」―植民地主義と博物館―

山路勝彦・田中雅一編著『植民地主義と人類学』関西学院大学出版社、二〇〇二年、三七六頁。

(3) 西川長夫『へ新』植民地主義論―グローバル化時代

の植民地主義を問う』平凡社、二〇〇六年、二〇〇—二〇三頁。

(4) 金子淳『博物館の政治学』青弓社、二〇〇一年、二〇—二二頁。

(5) 地域名として「朝鮮」という呼称を用いる。

(6) 一九三二年に成立した「満洲国」は、一九三四年の帝政実施に伴い「満洲帝国」となった。ただし本稿では、一九三二年～一九四五年まで「満洲国」という呼称を用いる。また、語義に鑑みて、略字「州」ではなく、正字「洲」を用い、煩を厭わずカギ括弧を付す。

(7) 山室信一「空間認識の視角と空間の生産」『岩波講座「帝国」日本の学知』第八巻、二〇〇六年、序章八一—九頁。

(8) 「満洲国」国立中央博物館を「奴隸化教育を執行する道具」とする中国の博物館史研究(王宏鈞編『中国博物館学基礎』上海古籍出版社、一九九〇年)や、植民地博物館としての「文化侵略性」を批判する研究(君塚仁彦「植民地博物館史研究を問う」王智新ほか編『批判植民地教育史認識』社会評論社、二〇〇〇年)、また、専論ではないが、社会教育の機能を利用して中国東北地方の人文自然科学資料を展示した日本による植民地支配イデオロギー形成の場とし、人々の思想と精神に与えた否定的影響の大きさを指摘する研究論文集(植民地文化学会・東北淪陥一四年史総編室共編

『満洲国』とは何だったのか』小学館、二〇〇八年)などがある。

(9) 矢島國雄「植民地と博物館」寺内威太郎・永田雄三・矢島國雄・李成市『植民地主義と歴史学』刀水書房、二〇〇四年、二三七頁。

(10) 駒込武「植民地帝国日本の文化統合」岩波書店、一九九七年、二頁。山本有造は、台湾・朝鮮・樺太を「純外地」ないし「領内外地」とする(山本有造「日本における植民地統治思想の展開(I)——「六三問題」・「日韓併合」・「文化統治」・「皇民化政策」——『アジア経済』三二—一、一九九一年、三頁)。

(11) 駒込武「植民地帝国日本の文化統合」二三七頁。

(12) 『朝鮮総督府官報』第九八八号、大正四年一月一日。

(13) 崔錫采「近代日本と朝鮮における博物館の『政治学』」博覧会、天皇と時局——『博物館研究』に現われた「日帝の博物館」の役割変化を中心に「早稲田大学朝鮮文化研究所編『コロンリアリズムと「朝鮮文化」——朝鮮総督府「朝鮮古蹟調査事業」をめぐる』(二二世紀COEプログラム関連シンポジウム報告書)、早稲田大学朝鮮文化研究所、二〇〇六年、四七頁。

(14) 国立博物館の成立過程に関して詳しくは、拙稿「満洲国」の博物館建設——国立博物館の成立過程と収

蔵品―』『史境』五五、二〇〇七年。

- (15) 朝鮮総督府編『施政二十五年史』(増補朝鮮総督府三十年史) (一)、(二)、クレス出版、一九九九年所収) 一九三五年、二二八頁。

- (16) 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、二〇〇八年、一一五頁。

- (17) 文教部礼教司『大同元年礼教事業概要』(『滿洲国』教育史研究会監修『滿洲・滿洲国』教育資料集成一―社会教育』エムティ出版、一九九三年所収) (推定発行年一九三三年) 四六一―四七頁及び國務院文教部『康德元年三月刊行滿洲国文教年鑑』國務院文教部、一九三四年、五頁。

- (18) 外務省外交史料館保管文書の「昭和七年四月滿洲国立図書館及同文化院設立ニ関スル件」所収の「滿洲国立文化院設立ニ関スル件」(陸軍作成) アジア歴史資料センターRef・B〇五〇一五二一―一五〇〇。

- (19) 国立文化院構想に関して詳しくは、拙稿「滿洲国の博物館建設―国立博物館の成立過程と収蔵品―」五一頁。

- (20) 朝鮮総督府発行『博物館報』一―一、一九二六年、三頁。

- (21) 朝鮮総督府『景福宮址案内』朝鮮総督府、一九三〇年、七・附録二頁。

- (22) 山路勝彦は、朝鮮博覧会の宣伝絵葉書に関する解説

で、会場となった景福宮の背後に朝鮮総督府が描かれていることについて、「この博覧会の政治的意図がうかがえる」と指摘する(山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』八、口絵五一)。なお、「滿洲国」国立博物館も、建物の外観を写した絵葉書が残っているが、日「満」共存共栄を諷しつつも、博物館には「滿洲国」の国旗のみが掲揚されている(国立博物館『国立博物館照片第一輯』座右室刊行会、一九三五年)。

- (23) 奉天省公署教育庁礼教科『礼教概要』(『滿洲国』教育史研究会監修『滿洲・滿洲国』教育資料集成一―社会教育』エムティ出版、一九九三年所収) 一九三五年、二四頁。なお正確には、奉天省公署教育庁社会教育股博物館係の所管。

- (24) 奉天省公署教育庁礼教科『礼教概要』二―三頁。

- (25) 奉天故宮博物館の閉鎖をめぐる問題に関しては、東三省博物館と奉天故宮博物館史と「清朝復辟派」であった金梁の事跡と思想、及び金梁と奉天故宮との関わりについて詳細に検討する作業が不可欠であると考えるため、別稿にて論じる予定である。

- (26) 李成市「朝鮮王朝の象徴空間と博物館」宮崎博史・李成市・尹海東・林志弦編『植民地近代の視座―朝鮮と日本』岩波書店、二〇〇四年、三六頁は「技師」と記しているが、学務局古蹟調査課および学務局宗教課には「技師」ではなく「技手」が配置されていた

『旧植民地人事総覧朝鮮編』四、日本図書センター、一九九七年、一八五・三四六頁。

(27) 朝鮮総督府『大正五年度古蹟調査報告』朝鮮総督府、一九一八年、九一〇頁及び『博物館報』各号、及び

有光教一・藤井和夫編著『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ公州宋山里第二九号墳高靈主山第三九号墳発掘調査報告一九三三、一九三九』財団法人東洋文庫、二〇〇二年及び早乙女雅博『関野貞と朝鮮古蹟調査』関野貞研究会編『関野貞日記』中央公論美術出版、二〇〇九年、七六三頁。

(28) 『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ公州宋山里第二九号墳高靈主山第三九号墳発掘調査報告一九三三、一九三九』序及び田中偵彦『二〇世紀前半の朝鮮総督府による朝鮮の歴史的建造物の調査保存事業について』『日本建築学会計画系論文集』五九四、二〇〇五年、二一〇頁。

(29) 藤田亮策は、宮内省書陵部にいたが、一九二二年に学務局古蹟調査課が設置されると黒板勝美の推薦を受けて古蹟調査課に移り、翌年から総督府博物館主任として実務を担当した。また藤田は、「満鮮不可分論」を唱え、「鮮満一如」は高句麗をもって極勢を迎え、文化的には、高句麗・百濟・新羅と日本は、互いに共通したものを備えていたと主張していたことで知られる（井上直樹『日露戦争後の日本の大陸政策と「満鮮史」―高句麗史研究のための基礎的考察―』七三頁）。

(30) 『関野貞日記』五〇〇頁。

(31) 『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ公州宋山里第二九号墳高靈主山第三九号墳発掘調査報告一九三三、一九三九』九四頁。

(32) 『大同元年 礼教事業概要』二頁。なおその後、一九三七年七月一日の行政機構改革に伴い文教部が廃止され民生部教育司が設置される。一九四三年四月民生部教育司廃止、文教部再設。社会教育は一九三七年民生部社会司社会科、一九四〇年一月の社会司改組に伴い新設された厚生司教化科および文化科、一九四一年文化科の廃止に伴い教育科が管掌。このような行政改革が行われたが、博物館事業は一貫して社会教育行政のなかに位置付けられていた。

(33) 東北人物大辞典編纂委員会編『東北人物大辞典』遼寧人民出版社・遼寧教育出版社、一九九二年、七六六頁及び『偽滿奉天博物館の成立与首任館長楊鍾羲』『遼寧省博物館館刊』第三輯、遼海出版社、二〇〇八年、六五七頁。在任期間は一九三五年四月から一九三六年十一月（偽滿奉天博物館の成立与首任館長楊鍾羲）六六五頁。

(34) 岡一朗編『満洲国職員録』斉藤印刷所出版部、一九三三年、一四七頁。

(35) 三宅自身の回想録によると、当時彼は国立博物館の囑託であり、また「満洲国」から満洲国古蹟古物名勝

天然記念物（文化財）調査委員を委嘱されていたという（三宅俊成『在滿二十六年遺跡探査とわが人生の回想』三宅中国古代文化調査所、一九八五年、一八二頁）。

(36) 杉村勇造著・杉村棟編『八十路―杉村勇造遺稿集』（私家本）一九八〇年、一三六頁。

(37) 李文信『李文信考古文集（増訂本）』遼寧人民出版社、二〇〇九年、八九九頁。

(38) 遠藤隆次「満洲国国立中央博物館の機構」『博物館研究』二二―二六、一九三九年、四頁。

(39) 『国立中央博物館時報』一、一二頁及び『国立中央博物館時報』二、二〇頁。

(40) ただし、全の指摘に資料的な裏付けは無い（全京秀「韓国博物館史における表象の政治人類学―植民地主義、民族主義、そして展望としてのグローバルイズム」『国立民族学博物館研究報告』二四―二六、一九九九年、二七一―二七二頁）。全のいう専門家の抑留とは、例えば有光教一が一九四六年六月まで総督府博物館で展示品の整理、古蹟の保存施設の事務を指導し、慶州の古蹟発掘調査にも関わったことを指すと思われる（藤田亮策「朝鮮古文化財の保存」『朝鮮学報』一、一九五一年、二四七頁及び梅原末治「日韓併合の期間に行なわれた半島の古蹟調査と保存事業にたざさわった一考古学徒の回想録」『朝鮮学報』五一、一九六九年、一四七頁）。

(41) 遼寧省博物館蔵宝録編輯委員会『遼寧省博物館蔵宝録（中国珍宝鑑賞叢書）』上海文艺出版社、一九九五年、前言。

(42) 藤田亮策「朝鮮考古学略史」『ドルメン』四―三、岡書院、一九三五年、一六頁。

(43) 『博物館報』一―一、五―一四頁。なお、一九三三年二月時点の本館展示室は「ホール」「三国時代古墳出土品」「楽浪帯方郡時代遺物」「絵画・壁画模写」

「高麗李朝時代工艺品及仏教関係遺物」と「中亜細亜将来品陳列室」（＝修政殿）であった（小泉頭夫「朝鮮博物館見学旅日記」『ドルメン』四―三、岡書院、一九三五年、三二―三六頁）。

(44) 『博物館報』四、一九三三年、二九頁。

(45) 以下断りの無い限り、三宅宗悦「奉天博物館展望」『国立中央博物館時報』四、一九四〇年、二〇―二五頁。

(46) アジア歴史資料センターRef.・〇五〇一六〇五七九〇〇「満洲国立博物館陳列陶氏碑石購入助成銀四〇〇〇元昭和九年七月」（外務省外交史料館日門六類「日滿文化協会関係雑件／経費関係第一巻」）。

(47) 満洲国文教部編集発行『文教月報』一八、一九三六年、五七頁。

(48) 渤海東京城調査の第一回調査は、一九三三年六月六日―六月二五日に行われた。参加者は、原田淑人（東

- 京帝国大学考古学担当助教授)・池内宏(東京帝国大学東洋史担当教授)・駒井和愛(東京帝国大学考古学担当助手)・島村孝三郎(東亜考古学会幹事)・水野清一(京都東方文化学院研究員)・外山軍治(京都帝国大学大学院生)・羽籠易(東方文化研究所)・鳥山喜一(京城帝国大学東洋史担当教授)・金毓黻(滿洲国)・国立図書館副館長)・金九經(滿洲国)・国立図書館員)・村田治郎(大連工業専門学校教授)。第二回調査は、一九三四年五月二〇日〜六月一九日に行われた。参加者は、前回参加者と、新たに矢島恭介(東京帝室博物館員)・三上次男(滿蒙文化研究所)、第一回調査に参加した金毓黻に代わり王興義(滿洲国)文教部宗教課長)が加わった(酒寄雅志「東亜考古学会の東京城調査」『東亜考古学会と近代日本の東アジア史研究』平成二六年度〜平成一八年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書、二〇〇七年、二一一五頁)。
- (49) 国立博物館の陳列品解説に、「たつた一枚の古銭とは云へ、……滿洲と日本との関係と云ふものが決して近代に始まつたものではなく、千年の昔から切つても切れない関係にあつた事を雄弁に物語る日滿両国の国宝とも云ふべきもの」とある(三宅宗悦「奉天博物館展望」『国立中央博物館時報』四、二四一―二五頁)。
- (50) 李文信「日寇在東北文化侵略的罪行」『李文信考古

文集』一四九―一五三頁(初出は『文物参考資料』第二卷第九期、一九五一年)。李文信はこのような指摘をしてはいるが、本稿注四八にあるように一九三三年・一九三四年の渤海東京城調査に参加していない。李が日本人研究者主導の発掘調査に参加したのは、一九三五年八月に、黒田源次・竹島卓一等による遼の慶陵の調査からである(李文信『字術年表』『李文信考古文集』八九九頁)。

(51) 「和同開珎」と「飛鳥奈良文化展覧会」については、拙稿「滿洲国」国立博物館の展示における「滿洲色」の創出―高句麗・渤海・遼の古蹟調査を背景として―『内陸アジア史研究』二五、二〇一〇年、一三六―一三七頁。

(52) 三枝朝四郎編『飛鳥奈良文化展覧会』満日文化協会、一九四〇年、五頁。

(53) 拙稿「滿洲国」国立博物館の展示における「滿洲色」の創出―高句麗・渤海・遼の古蹟調査を背景として―一三九頁。

(54) 早乙女雅博「関野貞と朝鮮古蹟調査」『関野貞日記』七五九頁。以下、断りの無い限り、関野に關しては『関野貞日記』を参照。

(55) 『博物館報』三、一九三三年、一頁。

(56) 早乙女雅博「総論植民地期の朝鮮考古学」『月刊考古学ジャーナル』五九六、二〇一〇年、五頁。

(57) 『博物館報』三、一頁。

(58) 鄭仁盛「植民地朝鮮における「古蹟調査」の記憶―関野貞による楽浪遺蹟の調査・研究」早稲田大学朝鮮文化研究所編『コロンリアリズムと「朝鮮文化」―朝鮮総督府「朝鮮古蹟調査事業」をめぐって』(二)一世紀COEプログラム関連シンポジウム報告書、早稲田大学朝鮮文化研究所、二〇〇六年、一七頁。

(59) 「満鮮史」は、日露戦争後、朝鮮と中国東北(満洲)を一つの歴史地理的空間とみなし、同時期に日本の東洋史学の一翼を担い、盛んに研究された。「満鮮史」研究のなかで朝鮮は単なる地域概念とされ、朝鮮史の自主性は否定された。「満鮮史」の代表的な研究者は、白鳥庫吉と稲葉岩吉で、一九〇八年には白鳥が後藤新平の支援を受けて、満鮮歴史地理調査室(正式名称は「南満洲鉄道株式会社歴史調査室」)を創設した。彼らの「満鮮」観の特徴としては、朝鮮半島の支配のためには、遼東半島も併せて領有することが肝要であるとした点と、その歴史的根拠を高句麗の歴史的存在に求めた点である(旗田巍「日本人の朝鮮観」旗田巍ほか『アジア・アフリカ講座Ⅲ日本と朝鮮』勁草書房、一九六五年、三七―三八頁及び井上直樹「日露戦争後の日本の大陸政策と「満鮮史」―高句麗史研究のための基礎的考察―」『洛北史学』八、二〇〇六年、六〇―六一頁及び中見立夫「日本的「東洋学」の形成と構図」

『帝国』日本の学知』三、二〇〇六年、三七頁。

(60) 寺内威太郎「満鮮史」研究と稲葉岩吉「植民地主義と歴史学」二〇〇四年、四二頁。

(61) 『博物館報』一一、三頁。

(62) 『博物館報』一一、六頁。

(63) 小泉顕夫「朝鮮博物館見学旅日記」三三三頁。

(64) 『博物館報』五、二七頁。

(65) 『朝鮮総督府博物館陳列品絵葉書第三編(其ノ二)』及び『博物館報』一一、一〇頁及び朝鮮総督府『博物館陳列品図鑑』第三輯(発行年記載無し)。

(66) 『博物館報』一一、一〇頁。

(67) 小泉顕夫「朝鮮博物館見学旅日記」三四頁。

(68) 『博物館報』四、一九頁。

(69) 『博物館報』一一、一一頁。

(70) 全吉秀「韓国博物館史における表象の政治人類学―植民地主義、民族主義、そして展望としてのグローバルリズム―」二五三頁。

(71) 宮里修「戦前の朝鮮における石器時代の調査研究について」朝鮮史研究会編『植民地朝鮮と日本の帝国支配』緑蔭書房、二〇〇〇年、七八―七九頁。

(72) 早乙女雅博『世界の考古学⑩朝鮮半島の考古学』同成社、二〇〇〇年、六頁。

(73) 『施政二十五五年史』五三三頁。

(74) 吉井秀夫「植民地時代慶州における古蹟調査事業―

古蹟調査を中心に―』『月刊考古学ジャーナル』五九  
六、二〇一〇年、一四頁。

(75) 千田剛道「植民地朝鮮の博物館―慶州古蹟保存会と  
博物館―』『帝塚山大学教養学部紀要』四四、一九九  
五年、二一―三頁。

(76) 『博物館研究』二二―四、一九三九年、六頁。

(77) 『博物館研究』二二―一〇、一九三九年、三頁。

(78) 『施政二十五年史』九二―頁。

(79) 『博物館研究』四―一一、一九三一年、六頁。

(80) 『朝鮮古蹟研究会遺稿Ⅱ公州宋山里第二九号墳高靈  
主山第三九号墳発掘調査報告一九三三、一九三九』九  
二頁。

(81) 『施政二十五年史』九一―三頁。

# Politics within the Historical and Archaeological Museum of Former Japanese Colonial Governments: A Case Study of the National Museum of Manchukuo and the Government-General Museum of Korea

OIDE Shoko

Key words: ①Manchukuo (「満洲国」), ②Chosen (朝鮮), ③Museum (博物館), ④Archaeological survey (古蹟調査), ⑤Exhibition (展示)

This research is a comparative study highlighting the differences between the Government-General Museum of Korea, a museum that served as the national museum of Korea under the “official empire,” and the National Museum of Manchukuo that served as the national museum under the “unofficial empire” of Manchukuo. This study specifically focuses on the backgrounds and goals of the museum establishments, building locations, managerial organization, historical accounts of artifacts, and the exhibits of each museum. The relations between each of these areas and the colonial policies affecting each museum were then compared.

The result of the analysis of academic sources and historical surveys shows that the displays at the Government-General Museum of Korea demonstrated the theme “unity of Japan and Korea.” In contrast, the National Museum of Manchukuo exhibitions were found to focus on goodwill and the strengthening of friendship between Japan and Manchukuo. Despite this, the activities of the National Museum of Manchukuo reflected in changes seen in the exhibitions, were represented by “Manchurian history” that rejected the reinstatement of the Qing dynasty.